

れはノイマンのというような表現技法の適否の問題ではなく、はっきりいって詩人の思想の質によるものと考えられる。〈Todesfuge〉における苦渋にみちた怨念のようなものがなくなってしまうとツェーランには手の届かないものがあるのではないか？ 逆にいえばこの挫折はツェーランの政治思想の挫折にすぎず、ツェーランの詩自体の挫折はここにはない。

第五章ではツェーラン自身が詩の存立を問いつづけていることが Wort, Sprache などの語を指標として説かれる。沈黙の Stein, Schnee, Eis, Kristall, 沈黙と言葉の中間に立つ Atem などの分析がある。《子午線》という das absolute Gedicht を、その不在を知りつつも求め続けてきたツェーランが、Atemwende をとげて個から人間一般へ、Nichts から Wahrheit へ、また Licht へと入っていくプロセスが説明される。

ツェーランの詩を分析し了解する作業は、この二人のドイツ人研究者の示したものが相補うことによってすでに基本的には達成されたといっているのではないか。残る二冊の詩集にわれわれが入りこむ際、これらの考察をふまえることはかなり有効であろう。だが〈了解〉ののちなおわれわれに対決をせまるものはなにか？ これはしばしば対比されていたノヴァーリス、ヘルダーリン、トラークル、また日本のある詩人たちにおいても同じ問題であるが、その答をここに期待することはできない。なお一見言語破壊的な試みの裏にあるたぐみな定型意識の逆用のこと、韻律のこと、喩法・構成のことなど、残された課題は少なくない。(1970・11・23稿)

Peter Paul Schwarz: *Totengedächtnis und dialogische Polarität in der Lyrik Paul Celans* 1966, Pädagogischer Verlag Schwann.

Peter Horst Neuman: *Zur Lyrik Paul Celans*. 1968, Vandenkock & Ruprecht.

Gertrude Himmelfarb: *Victorian Minds*

山田 泰 司

ヴィクトリア朝思想もしくは思潮を取り扱った主な研究書として、われわれは D. C. Somervell: *English Thought in the Nineteenth Century* (1929), Basil Willey: *Nineteenth Century Studies* (1949), *More Nineteenth Century Studies* (1956), J. H. Buckley: *The Victorian Temper* (1951), Asa Briggs: *Victorian People* (1954), Walter E. Houghton: *The Victorian Frame of Mind* (1957) などをもっているが、ここに紹介する *Victorian Minds* によってヴィクトリア朝思想研究は、いっそうの厚味を加えることになった。著者 Gertrude Himmelfarb はニューヨーク市立大学の歴史学教授で、*Lord Acton: A Study of Conscience and Politics* (1952), *Darwin and the Darwinian Revolution* (1959) などの好著の著者であり、アクトン卿の論文集、マルサスの『人口論』、J. S. ミルの論文集などの編者でもある思想史家である。

本書に収められている13篇の論文は、3,4篇を除いてすべて編著の序文または学術・評論雑誌への寄稿論文からの転載であるが、それらは本書に収録されるにあたって大幅に書き改められており、寄せ集めという感じをあたえない。全体は3部から成り、「原ヴィクトリア朝人」(Proto-Victorians)の部にはエドマンド・バーク、ベンタム、マルサスがとりあげられ、「ヴィクトリア朝最盛期人」

(High Victorians) の部には J. S. ミル、アクトン卿、レズリー・スティーヴン、バジレット、ジェームズ・アンソニー・フルード、ジョン・バカンが取り扱われ、「ヴィクトリア朝思想とイデオロギー」(Victorian Ideas and Ideologies) の部は「ヴィクトリア朝気質：ヴィクトリア前後」、「ヴィクトリア朝人の不安」、「社会ダーウィン主義の変種」、「政治とイデオロギー：1867年の選挙法改正」と題する4篇の論文から成っている。

とりあげられている人物はバーク(1729—97)からジョン・バカン(1875—1940)までというふうな年代的にヴィクトリア女王時代(1837—1901)からはみ出ているが、ヴィクトリア朝思想史ないし社会史がその前後の時代との関連なしには到底理解できない性質のものであることが、近年の研究の深まりと共にいよいよ明らかになってきたことを考え合わせれば、当然にして必要な取り扱いであろう。また、ヴィクトリア朝最盛期の知識人としてカーライル、ニューマン、ジョージ・エリオット、マシュー・アーノルドなど、いわゆる「ヴィクトリア朝の偉人」(“Great Victorians”)と見なされる人物がとりあげられていないが、思想史(intellectual history, history of ideas)は、ある時代の第一級の思想家を洩れなく対象としなければならないというものではない。むしろ、その時代を代表するような思想家(representative minds)——それは時代の最高の知性とかならずしも一致しない——に重点を置くのが思想史にはふさわしいことを思えば、本書が絶対的な意味で第一級とは言えない思想家・知識人(著者のいう“second-best” minds)をもとりあげたのは賢明な処置と言えよう。

これら思想家への著者の接近法は論文によって異なっている。時に伝記的、解説的、分析的(本文批評的)である。たとえば、ミル論(‘The Other John Stuart Mill’)が主と

して伝記的であるのは、ミルの著作が彼と父親との関係、またのちに妻となったハリエット・テイラーからの影響を考慮しなければ理解できない性質のものであるという確信に基づいている。これに対してマルサス論(‘The Specter of Malthus’)は『人口論』の第一版と第二版とを厳密に検討して両者間に‘drastic’な変化が見られることを指摘しているという意味で本文批評的であり、さらにベンタム論(‘The Haunted House of Jeremy Bentham’)はベンタムが生涯とりつかれていたモデル監獄 panopticon に焦点を合わせて、彼のラディカリズムと言われているものがいかに欺瞞に満ちたものであったかをあばいて見せたものである。どの論文においても十分な証拠と共に綿密な(時に精神分析的な)論証がなされていて、これら個々の思想家の専門的研究家でなければ論ばくなどできないような行き届いた論考として読めるのであるが、著者には時にある種の先入観らしきものが働いていたのではないと思われるふしがある。その一つは偉大なリベラルとされている人物が実はおそろしく非リベラルであるか、または全く保守的であるという先入観である。彼らの私生活のある局面と彼らが世間に対して見せる立派な外見や態度との間に食い違いを見出すことによって、そのことの論証がなされている。もう一つの著者の勘と思われるのは、ヴィクトリア朝の代表的知識人たちの膨大な量の著作は、彼らが真にその中に生きていた原始的恐怖に対する防御であったのではないかという直観である。たとえば、レズリー・スティーヴンは、そのおびただしい著作にもかかわらず、私生活においても知識人としても失敗者であったときめつけられている。著者はその論証を進めるにあたって、スティーヴンの娘ヴァージニア・ウルフが小説『燈台へ』で描いた暗いラムゼイ像を枕にしている。さらにスティーヴンに

とって都合の悪いことには、彼は登山、ボート、散歩など筋肉運動に熱中した。この事実は著者には神経病的な妄想状態と映るのである。いかにも「現代的」解釈ではあるが、彼の名著『18世紀イギリス思想史』、『イギリス功利主義者たち』が失敗作である所以を説明できなければ、彼の知識人としての失敗を証明することにはならないのではあるまいか。それはともかく、著者の思想家論は伝記的解釈が加味されることによって、ウィリーなどのオーソドックスではあるが平板な論考と比べて、まことに生彩ある、'challenging'な「解釈」になっていることは認めなければならぬであろう。

われわれヴィクトリア朝文学を読む者にとって最も興味があるのは、「ヴィクトリア朝の思想とイデオロギー」の部に収められた「ヴィクトリア朝の気風：ヴィクトリア前後」('The Victorian Ethos: Before, and After Victoria')と題する論文である。いわゆるヴィクトリアニズムなるものが存在したかどうか、存在したとすればそれはどのような基盤をもつものであったか、議論が絶えない。著者はヴィクトリアニズムなるものが存在したと主張する。そして、著者によれば、それはウエスレーの唱えた福音主義に基づくものであったという。福音主義の宗教的要素が衰えても、義務や良心を重んずるその道徳的要素は残った。さらに、その内面的要素が失われ形骸化することがあっても、その形式は保たれていた。この福音主義と J. S. ミルによって修正された功利主義とが合流して、「革命的保守主義」('revolutionary conservatism')ともいうべきものが形成され、それによってヴィクトリア朝文化は支えられていた、というのが著者の見解である。このような見解をとる著者は、フランス革命時代にイギリスに反乱が起こらなかったのはウエスレー主義の影響力によるとするエリー・アレヴ

ィ (Elie Halévy) の説、アレヴィ・テーゼ ('Halévy thesis') に賛同する。このテーゼは散発的に挑戦を受けてきたけれども、いぜんとして有効であると著者は見ている。

ヴィクトリア朝人は自己満足していたのであろうか。少なくとも知識人はそうではなかった。彼らは現代病である *Angst* に苦しんだ。ただそのような不安に身をまかせることなく、何とかそれから脱れようとした点で、現代のニヒリストたちと異なると著者は「ヴィクトリア朝の不安」('The Victorian Angst') の中で述べている。この不安こそ、信仰と不信仰との公分母であり、弟フランシス・ニューマンと兄ジョン・ヘンリー・ニューマンのごとき人物をつなぐきずなであったのであり、この不安に駆られて弟が「人心を荒廃させる否定」から理性と徳とに休息を求めたように、兄がカトリック教に魂の安らいの場所を求めたのだと著者は説明する。この論文はきわめて説得力のあるものであるが、さらにマーク・ラザフォードの場合が加えられたら、いっそう内容豊かなものとなつてあろう。

本書はヴィクトリア朝思想の陰影をよく扱っている。しかし、彼ら知識人をあのおびただしい著作に駈り立てたエネルギーの秘密を原始的恐怖に対する防御であったと片付けるわけにはいかないであろう。

Gertrude Himmelfarb: *Victorian Minds*. 1968, Weidenfeld and Nicolson.